

# 日の出太陽の家物語

創設編 「二人ひとりが太陽に」

久保田武男

## 日の出太陽の家物語

東京都日の出町に小さな障害者施設があります。

名前は「日の出太陽の家」、一人一人が太陽のように輝いて生きることを願って名付けられました。

この、小さな施設が歩んできた歴史と物語をお届けします。



施設全景



日の出太陽の家



武家屋敷



囲炉裏の間



座敷

日の出太陽の家の敷地内には、築百四十年の立派な古民家があります。地元で武家屋敷と呼ばれるこの古民家は、地元の富豪が三代かけて蓄財し、明治四年から十年間かけて建てられました。当時、この富豪は大変羽振りが良く、長男には七歳で背広を着せて村を闊歩させ、次男は外交官を目指してアメリカ留学させました。しかし、十五代続いた家系も、最後の家主が太平洋戦争に召集され戦死、その後、手放されました。

### 料亭「八幡亭」

一時は企業の別荘などに買い取られました。昭和四十年後半から高級料亭「八幡亭」として営業を開始しました。「八幡亭」は一時期大変賑わいましたが、昭和五十二年に営業を停止し、再び売りに出されました。

## 中島正清さん

この武家屋敷と裏山を買い取ったのが、日の出太陽の家創設者の中島正清さんでした。中島さんは、大正十四年に大阪市で町工場を経営する父母の元に長男として生まれました。八歳の時に母親を亡くし、その後、父親の経営していた会社を大きくすることだけに打ち込んできました。しかし、幼少の頃の辛い体験から、いつか「同じ辛い思いをしている人たちの役に立ちたい」と思い始めました。中島さんの父親も「いつか、福祉の仕事をしたい」と言い続けましたが、夢を果たすことなく亡くなりました。



中島正清氏

中島さんは事業を拡大し、会社も順調に伸び、社長として五十歳を迎え、これからという時、突然、社長を辞任しました。福祉の仕事をするためです。東京都に相談に行ったところ、

「老人施設をやってくれる人はたくさんいるのですが、知的障害者施設はやってくれる人がなく、東京都で知的障害を持った人たちは、都外の施設に送り

出しているのが現状です。」

との説明を受けました。

そこで、中島さんは知的障害者施設を建てる決心をしました。

## 「こころみ学園」

各地の障害者施設を見学に行ったところ、栃木県足利市の「こころみ学園」の川田昇園長から

「知的障害を持った人たちは、急斜面をのぼり降りすることで、バランス感覚を養い、手足の先まで神経が活発になり、非常に良いリハビリになる」との説明を受けました。

川田園長は昭和三十三年から雑木林を開墾し、利用者と一緒にブドウの木を植え続けました。それから五十年たった今（平成二十四年）、山はすべてブドウ畑に変わり、園の目の前の岩盤をくり貫いてワイン貯蔵庫を作り、敷地内にワインレストランを開店しています。年間六万本のワインが製造され、そのワインは沖縄サミット、洞爺湖サミットの首脳会議の乾杯にも使われました。障害者が作ったことを伏せて選ばれたこのワインは『奇跡のワイン』と呼ばれています。



ぶどう畑全景



急斜面で作業する利用者



## 日の出町に土地を見つける

川田園長からアドバイスを受け、土地を探していたところ、東京都日の出町で武家屋敷と裏山が売りに出されていることを知り、見学に来て武家屋敷がとても気に入り、即、購入を決めました。その時の中島さんは、

- ① 武家屋敷を生かした障害者の作業、就労、社会参加
- ② 裏山を使った作業
- ③ 武家屋敷、裏山を活用し、地域（社会）との交流
- ④ 障害者理解と社会貢献活動を考えていました。

## 障害者施設用地として買収し地元から激しい反対運動

ところが、地元から激しい反対運動が起きてしまいました。

反対運動の理由は、

- ① 暴力を振るわれる。
  - ② 勝手に住居に入られる。
  - ③ 物が盗まれる。
  - ④ 子供や地域住民に恐怖感を与える。
  - ⑤ 女性が一人で歩けなくなる。
- などの、知らないことから生じる恐怖心からのものでした。

さらに、社会的背景から、

- ① 重要文化財級の建物をなぜ障害者施設にする必要があるのか。
- ② 都会のゴミの処分場、多くの老人ホーム、障害者施設・・・人口二万人弱の町に十数個の福祉施設。都会の人は、使えなくなったら、なんでも郊外、山の中に捨てるというのは「現代姥捨山」だろう。

という地域の見方もありました。

地元の住民が悪いわけではありません。そのころ、東京では知的障害者施設をどこに作ろうとしても反対され、都内に作ることを断念し、近隣の県や、

遠く北海道にまで障害を持った児たちを送っていました。もし、ここで障害者施設ができないと、都内では永久に施設はできないだろうと言われていました。

障害を抱えるわが子の前途を悲観し、無理心中を図った事件が頻繁に起きていました。

## ボランティアとの出会い

反対運動の只中、中島さんを支え応援したのはたくさんボランティアでした。地元を説得して回り、障害を持った人たちを理解してもらおうと武家屋敷で宿泊訓練を行いました。地元の人たちは、若いボランティアと障害を持った人たちが、一緒に行動し何も問題が起きないことを遠くから眺めていました。そして、徐々に反対運動は沈静化し、ついに賛成を表明してくれる家族も現れました。この宿泊訓練は何年も何年も続きました。この宿泊訓練で最も影響を受けたのは創設者の中島さんでした。若いボランティアが手弁当で、人のために汗を流す。それも笑顔を持って・・・。

「世の中にはボランティア人って、本当にいてはるんやー!」

中島さんはボランティア人によって大きく勇気づけられました。



宿泊訓練参加者

坂本堤（つづみ）さんと都子（やとこ）さん

このボランティアの中に、坂本堤さんと大山都子さんがいました。

大学を卒業して間もない二人は、坂本さんが司法浪人中で、都子さんが法律事務所働きながら坂本さんの生活を支えています。お二人は大学生の頃、お互いに障害者ボランティアをしており、車椅子全国集会で出会いました。ある時、「フオスの戦火から逃れてきた難民の子供たちを、日本の子供たちと一緒にキャンプさせたい」と中島さんを訪ねてきました。中島さんは快く武家屋敷の提供を申し出ました。障害者施設建設反対の看板の林立にお二人は衝撃を受け、その後、武家屋敷での障害者キャンプに参加するようになりました。

彼らは後に結婚し、堤さんは司法試験に合格しました。後に長男竜彦ちゃんが生まれ、年賀状にこう書かれていました。

「竜彦が生まれ、この子の瞳が曇らないような世の中を作っていきたいと思っています」

弁護士になった坂本堤さんは、オウム真理教に敢然と立ち向かいました。そして狂気の教団により、一歳の竜彦ちゃんを含め一家全員が殺害されてしまいました。（一九八九年横浜法律事務所弁護士一家殺害事件）

若い時からボランティア活動に参加し、よりよい社会を作るために活躍してきた堤さんと都子さんの遺志は、今でも日の出太陽の家と武家屋敷に生きています。中島正清さんは亡き坂本弁護士一家のために、裏山に「花咲稲荷」を建立し、ご一家の霊を慰めています。



花咲稲荷



## 日の出太陽の家誕生

反対運動から七年、地元住民の理解を得て、日の出太陽の家が開所しました。計画から十年、一九八七年（昭和六十二年）春の事でした。

やっと、障害を持つ親子が近くで暮らせるようになったのです。中島さんは、「障害のある人もない人も、みんなが太陽のように輝ける施設にしたい」と、「日の出太陽の家」と名付けました。家庭的な雰囲気大切にしたいと、利用者を三十人に決めました。小さな小さな施設ですが、東京都の障害を持つ子を抱える親御さんにとって、大きな一歩でした。

その後、都内のあちこちに障害者施設が建つようになったのです。



日の出太陽の家

## 共に生きる

当時の反対運動のリーダーは振り返ります。

「反対運動の最大の理由は、障害者施設に対する知識がなかったことです。全く未知のものを、突然凶面を示されて「すぐに作らせてください。」と説明されたんで地元民は反発してしまっただけです。なぜ障害を持つのか、どのような特性があるのか、家ではどのように暮らしているのか、家族はどんな思いを持っているのか、もっと時間をかけた説明が必要だったと思います。また、中島さんがどのような人か誰も知らなかったために、誤解が雪だるま式に膨れ上がり反対運動に発展していきました。」

しかし、結果的に日の出太陽の家ができて良かったと思います。地域の行事に利用者が出てきて盆踊りやカラオケ大会ができて地域に活気が出てきました。若いボランティアさんがたくさん来てくれて、利用者の介助をしている姿を見ると心が洗われます。若い人の一生懸命な姿を見ると私たちも自然と利用者のために何かしたくなる。

このような施設はもっと作る必要があると思います。今後、どこかで反対運動が起きたら私たちが説得に行きます。この子たちは、決して悪い子ではない。一緒に楽しく暮らしていけます。「この地でそれができているのだから。今は、遠くの家族より近くの住民だと思っています。何かあったら真っ先に飛んでいきますよ。」

十年間の反対運動は双方にとって決して無駄になっていなかった。お互いが障害者とその家族、人間の幸せについて真剣に考えた時期でした。今日の出太陽の家が地元の人たちから温かく見守っていただけのもの、人間が人間としてお互いを認め合って助け合って生きていこうという、地元の人たちが古くから培ってきた共生の思想によるものだと思います。

一人一人が太陽に

開所と同時に広大な裏山を生かしていくための「花咲き山夢マップ」が作成されました。施設ができたらあんなこともしたい、こんなこともしたいと温めてきた夢のマップでした。



そして山道作りから始まり、シイタケの栽培が始まり、フィールドアスレチック作りが始まりました。利用者と職員とボランティアによる夢の実現に向けての一步でした。



山道作り



フィールドアスレチック

利用者の自立を目指す作業として、平井農園での野菜作りが始まり、障害を持った利用者が草刈り機を操作して草刈りを行い、耕運機を使って畑を耕すことができるようになりました。



草刈機を操作する利用者



耕運機を使う利用者

農作物の収穫には中島さんご夫婦も喜んで参加し、利用者と一緒に楽しみました。

今も農園は続けられ、収穫された野菜は給食に使われ、余った野菜は野菜市として日の出太陽の家の玄関に並べられています。



平井農園でサツマイモを収穫する中島ご夫妻



## 向井千秋さんに大壁画プレゼント

陶芸班では先生の指導のもと、粘土をこねる作業から始め、いろいろな作品を制作しました。

日本人初の女性宇宙飛行士向井千秋さんが宇宙に行ったときには「宇宙への旅」という作陶画を作り、直接、向井千秋さんに届けに行きました。向井千秋さんは筑波宇宙センターの玄関で三十人の利用者を出迎え、一人一人と握手をして

「一粒一粒に、宇宙への想いをこめて作った大壁画をいただき、よい記念になります。ここを訪れる人に、宇宙旅行と同じ努力・協力の大切さが伝わり、宇宙に関心を持っていただくきっかけになります」

と大変感謝されました。その後、わかりやすく宇宙の話をしてくださり、利用者も大感激のひとつでした。

大壁画は、その後も筑波宇宙センターのロビーに飾られて、訪れる人たちの目を楽しませました。



向井千秋さんと陶壁画「宇宙への旅」

日の出太陽の家の利用者は、一人一人が太陽のように輝きだしたのです。



## 武家屋敷はボランティアの研修所として

中島さんは、反対運動が収まり施設が建設されたら、武家屋敷を若いボランティアの研修施設として開放することを決めていました。十年間、ずっと若きボランティア人と接していて、ボランティア人が世の中を変えてくれると確信したのです。多くの若者が武家屋敷を利用し、ボランティア活動を経験すれば、きっと素晴らしい世の中を作ってくれるに違いないと確信しました。そして武家屋敷をボランティア人に開放したのです。

### ボランティア

知らないことが不安を呼び

不安が恐怖心を呼び

恐怖心が 差別を生む

知らないことから生まれる差別が

最も悲しくつらい

だから知ろうとする努力

自分の目で確かめる勇氣

目を背ける前に まっすぐ見つめる勇氣

それこそが必要だ

ボランティアとは

心の開拓者でもあるのだから

## 花咲き山

反対運動の只中、中島さんを支え応援してきたボランティアの中に、地元  
のボランティア団体「花咲き村」がありました。「花咲き村」の名前は、斎  
藤隆介作の絵本「花さき山」からつけられました。

やさしいことを すれば 花がさく。

いのちを かけて すれば 山が うまれる。

(絵本「花さき山」 作・斎藤隆介 絵・滝平次郎 出版社・岩崎書店から引用)

花さき山の一節です。中島さんは、この一節を大変気に入り、武家屋敷を  
含む施設全体を「花咲き山」と名付けました。ふもとの人たちがたくさん訪  
れて、世の中にたくさんの花を咲かせてもらいたいという思いからでした。  
そして、日の出太陽の家の広報誌を「花咲き山だより」と名付けました。

## 花咲きまつり

開所後、中島さんを計画段階からずっと支えてきたボランティアから「地元の人やたくさんの人に日の出太陽の家を見学してもらい、障害者理解につながるためのイベントを開催したらどうか」と提案がありました。

中島さんは、施設を開放することで障害者理解へつながり、地元への恩返しができるかと賛成し、若葉がきれいな五月の連休に開催することになりました。

イベントの名前は、絵本「花さき山」にちなみ「花咲きまつり」と名付けられました。たくさんの人に訪れていただき、ふもとの村で花を咲かせていただきたいという願いからです。このようにして花咲きまつりは始まりました。



花咲きまつりのテープカット



## ボランティア体験講座

一九九二年から十年間にわたり、本格的なボランティア体験講座が武家屋敷を中心に行われました。多くの若者の人生に影響を及ぼす素晴らしい体験講座でした。参加者五十人は武家屋敷に宿泊し、①太陽の家実習体験コース、②近くの重度身体障害者施設から立川までの車いす介助体験コース、③花咲き村の指導による山の草刈り体験コースを用意し、三日間ですべてのコースを体験する画期的な講座でした。



車いす外出介助



草刈りボランティア体験

若者たちは、初めてのボランティア体験で森林で汗を流し、車椅子外出で街の障壁に苦しみ、日の出太陽の家では利用者の純粋な心に感動し、夜の武家屋敷でのミーティングでは、涙と感動の報告が行われました。

実は、多くの若者たちは、自分自身が傷を負い、助けを求めてこのキャンパスに参加していました。両親の離婚、家庭内暴力、学校でのいじめ、成績でのみ評価される学校生活、何のために学ぶのか、生きる目的が見えない……。

それらの悩みを打ち明けながら、囲炉裏の部屋で夜を徹して話していました。この体験講座で育った若者は、今、様々な分野ですてきに活躍しています。「あの出会いから勇気をもらった。皆さんに笑顔をもたらした。もう、負けなうー」

## 天国を作る活動

中島さんは、そんな若者たちを見て目を細めて言いました。

「私な、お坊さんからとても良い話を聞きました。

『皆さん、死んだら天国はあると思いますか。地獄はあると思いますか。

死んだら何もありません。死んだら無です。天国を作るのも、地獄を作るのも、生きている時に、生きている皆さんが作るのです。ボランティア活動は、天国を作るのにもっとも近い活動なのです。』

私もその通りだと思います。どこかで、生きているうちに天国を作る活動をたくさんたくさんしてください。」

中島さんの想いは、世界の若者に届き、世界中からボランティアが集まってきました。武家屋敷は、今では世界の若者の間で「サムライハウス」として有名です。



毎年行なわれている国際ワークキャンプ



## 絶望の淵から

日の出太陽の家が開所し十年が経ち、施設も順調に運営されていました。中島さんは七十三歳になっていました。

その年、突然のアクシデントに見舞われました。

ある寒い日、外出から帰った中島さんは玄関に向かう途中、石の階段で転倒し頸椎を損傷してしまいました。救急車で病院に運ばれましたが、首から下に感覚がなく、手も足も全く動かなくなってしまいました。救急病院では措置できず、身体障害専門の国立村山病院（現在の村山医療センター）に転送されました。意識はしっかりしていたが、身体は全く動きませんでした。



村山病院入院病棟

病院の入院患者は、交通事故などで首の骨を折り（頸椎損傷）身体が全く動かない人、交通事故やスポーツで腰の骨を折り（腰椎損傷）腰から下が全く動かない人ばかりでした。突然の事故で本人も家族も絶望の淵にいました。

中島さんは、自身も寝たぎりのベッドの上で、辛く悲しい家族の姿をたくさん見ました。しかし、自分ではどうすることもできませんでした。

## 再びボランティアが

その時、中島さんを見舞い励まし続けたのが、反対運動の只中で中島さんを支え続けたボランティアたちでした。毎週、病室を訪問し、車いすに乗せ街を散歩しました。中島さんは、春の陽光をまぶしそくに眺めていました。

病室に戻って談話室で中島さんを囲んで談笑しました。

「あの頃と同じ仲間が集まりましたね。いつも、こうして希望を語り合いましたね。昔に戻ったみたいです。」

「中島さんは、いつも希望を捨ててはいけないうって言っていました。今、病室の患者さんともご家族も絶望の淵にいます。ここで、希望を示せるのが中島さんですよ。」

「まだまだ、やっていただきたいことがたくさんあります。早く元気になって帰りましょ。」

昔からの仲間は、中島さんを励まし続けました。中島さんは、ニコニコしながら聞いていました。

ある日、病室に戻った中島さんは、奥さんに言いました。

「母さんや、わしは歩いて家に帰るぞ。先生に、首の骨をボルトでつなげば神経が通うといわれたんで、先生に手術を頼んでみるわ。」

病室のみんなは目を丸くして聞いていました。

その2週間後に手術は行われました。



村山病院玄関

手術後、中島さんの懸命なりハビリが始まりました。病院で最高齢の中島さんのリハビリの姿は、病院内でも話題になり、多くの患者の励みになりました。絶望の中においても決してあきらめてはいけないことを、身をもって示しました。



リハビリの行われた体育館

## 奇跡

そして、奇跡は起きました。

一か月後には手に感覚が戻り、三か月後には足にも感覚が戻りました。

半年後には立ち上がれるようになり、必死のリハビリを行い、なんと一年後には杖を突いて庭を一周できるまでになったのです。それは、本人の懸命の努力による奇跡でした。



杖をついて中庭を一周できるようになった  
中島さん

そして、一年半後に退院の日を迎えました。

退院の日、中島さんは同室の患者さんに言いました。

「皆さん、七十四歳のわしが歩けるようになったんです。若い皆さんが治らないはずがありません。医学はどんどん進歩しています。希望を捨てないでください。元気になって、ご家族孝行をしてください。お願いしますよ。」  
同室の患者さんたちは涙を流して中島さんを見送りました。

やさしいことをすれば花が咲く

それから十年、中島さんは退院しても懸命のリハビリを続けていました。いつも日の出太陽の家の利用者のこと、病室で出会った人たちのことを気に遣っていました。

中島さんは、八十三歳で再度大きな手術をし、家族には余命三か月と告げられました。病床の中にあって、枕元の奥さんに尋ねました。

「母さんや、わしは、少しでも花を咲かせることができたかなあ・・・。」

奥さんは答えました。

「お父さんは立派な花を咲かせましたよ。これからは、若い人たちがたくさんたくさん花を咲かせてくれますよ。」

中島さんはうれしそうに微笑みました。

## 遺言

平成二十年六月二十三日早朝、中島正清さんは八十三歳で他界されました。

「私が死んだら、私の身体を大学病院に献体してください。」

家族に残した遺言でした。日の出太陽の家に入所されている方々の障害もまだまだ解明されていないことがたくさんあります。そして、病院で出会った患者さんたちへのメッセージでもありました。

「若い皆さんが治らないはずがありません。医学はどんどん進歩しています。希望を捨てないでください。元気になって、ご家族孝行をしてください。お願いいたしますよ。」

医学の進歩のために自らの身体を献体として大学病院に提供されました。



やまごいことをすれば花がなぐ。いのちをかけてすれば山がうまわる。  
うそではない。ほんとうのことだ……。

中島正清さんはたくさんの花を咲かせ、大きな山をつくってくれました。

今度は、私たちの番です。



納涼祭



高校生ボランティアとの交流会



沖縄から那覇太鼓の訪問

あとがき  
日の出太陽の家は、たくさんの方に支えられて、開園二十五周年目を迎えました。これからも、中島正清さんの想いを胸に、一人一人が太陽のように輝けるよう、笑顔を絶やさず歩み続けてまいります。皆様の温かい応援を願います。

## 日の出太陽の家物語

創設編 「一人ひとりが太陽に」

※この冊子は一九九七年に発行された『日の出太陽の家物語』（けやき出版）を要約し、その後の出来事を追記したものです。

発行 NPO法人日の出太陽の家ボランティアセンター  
障害者支援施設日の出太陽の家

〒一九〇―〇一八一

東京都西多摩郡日の出町大久野五一〇七番地

電話 〇四―一五九七―二八一

eメール [info@taiyanoie.org](mailto:info@taiyanoie.org)

発行日 第一版 平成二十四年（二〇二二年）五月四日  
第二版 令和三年（二〇二二年）三月二〇日

